



アメリカマンハッタンでの留学体験から

2021年度採択者 小坂田拓哉

私は2018年9月からアメリカニューヨーク州にあり、ニューヨーク大学Langone Medical Center (NYULMC) に特任研究員として所属しています。そのなかで、2022年2月から1年間、早石修記念海外留学助成のご支援を賜りました。助成によって受けることができている恩恵は数知れず、この場をお借りして御礼申し上げます。また、早石修記念留学海外助成は海外での研究活動をすでに始めている研究者にも門戸を開いてくださっており、その有難さを渡米後に強く感じました。

留学後は、NYULMCのNeuroscience Instituteで研究室を主宰しているDayu Lin博士のもと、社会行動を制御する脳神経回路に焦点をあてて研究を遂行しております。渡米前は東京大学大学院農学生命科学研究科の東原和成先生の研究室にて、マウス涙液中に含まれるフェロモン分子の受容やその情報伝達機構等について研究を行い、博士号を取得させていただきました。現在Dayu Lin研究室でシステム神経科学の研究を行っているのは、博士課程において生得的な社会行動を制御する緻密な神経回路基盤に関心を持ったことに起因します。

私が研究室に加わったのは2018年の秋ですが、その前年に学会で渡米する機会があったのに合わせ、訪問、ポストドクインタビューをさせていただきました。社会行動の回路基盤について海外で研究を進めてみたいという想いを有していたこともあり、それを機にDayu Lin研究室でポストドクトレーニングを積むことを決意いたしました。現在はzoom等でインタビューを受けることが可能になり、それで済むことも多いかと思えます。様々な面から無駄がなく良いことです。しかしながら、コロナも収まってきましたので状況が許すのであれば、留学を念頭に置いている方は興味のある研究室を事前に訪問してみるのがよいのではと個人的には感じます。その後の数年間を過ごす大事な環境になると思えますので、その環境 (PIや研究・生活環境との相性等も含め) がマッチしていないほど残念なことはありません。(何度も顔を合わせているPIの研究室であればその限りではないかもしれませんが。) 研究室は、PIの立場 (研究室を立ち上げてからの期間) や構成員によって常に姿が変化するものです。同じPIの研究室でも様々なタイミングによってその内情は大きく異なります。PIや研究室のタイミングと自分が求める姿が合致しているかを確かめるためにも、事前の訪問は有益であるかもしれません。

Dayu Lin博士はアメリカDuke大学で博士号を取得し、

そして、ポストドク期間をCaltechで過ごしていますが、彼女のバックグラウンドは中国・上海にあります。研究室メンバーに中国出身の方が多いこともあり、ニューヨークにいながら、中国の勢い・雰囲気を度々感じるのは何とも不思議ですが、ひとつの期間に様々な風土を知ることができるのは有難い限りです。研究の進め方、個々のテーマへの介入の仕方は各PIに依存するところですが、Dayuはテニユアを取得した今も各構成員と隔週でone-on-oneでディスカッションを行う時間を確保しています。各研究課題の生データと密に向き合う姿勢や、そこから生まれるスマートなアイデアからは学ぶ点が多くあります。Dayuからは、様々な場面において、鈍く光る研究課題をどのように洗練させていくのか、また、そのために何が大切であるのかを日々学ばせていただいています。

NYUが位置するマンハッタンは大都市であるがゆえ喧噪の絶えない街ですが、それゆえに存在する魅力もたくさんあると思えます。まさしく「人種のサラダボウル」の名の如く様々な人種、バックグラウンド、職種の人々が今日と未来のために活動しています。研究や生活スタイルの好みは人それぞれですが、研究室内外で様々な方から刺激を受けることができますし、スポーツ、アート、ミュージカルを筆頭に街に不足はありません。マンハッタンはPhDコースや特任研究員の時期を過ごすのに良い環境のひとつかもしれません、と留学を念頭に置いている皆様にはお伝えしたいと思います。マンハッタンには、コロンビア大学やロックフェラー大学を筆頭に数多くの素晴らしい研究機関が存在します。ボストンやカリフォルニア等もそうであると思いますが、トップの研究機関が近い距離に存在するというのもひとつの良い面になり得るでしょう。

最後になりましたが、選考委員等を務めてくださった先生方や手続きをスムーズに進めてくださった日本生化学会事務局の皆様にご心より御礼申し上げます。また、新しい環境のなかで沢山の機会を与えてくださったDayu Lin博士、そして、研究者としてのベースを築くのを支えてくださり、現在の進路のきっかけも与えてくださった東原和成先生に御礼申し上げます。今後は、これまでの日々で得たものを最大限に生かしながら、独創的な研究成果を様々な分野・世代の研究者の方とタッグを組んで発信していけるよう研鑽に励んでまいります。

(現 ニューヨーク大学Langone Medical Center 特任研究員)